

## 駱綺蘭の『聽秋軒閨中同人集』および『聽秋軒贈言』について

蕭, 燕婉  
中山醫學大學 : 助理教授 | 中山医学大学 : 助理教授

<https://doi.org/10.15017/9603>

---

出版情報 : 中国文学論集. 33, pp.120-134, 2004-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 駱綺蘭の『聽秋軒閨中同人集』および『聽秋軒贈言』について

蕭 燕 婉

筆者は、前稿「閨秀詩人駱綺蘭小伝——清乾嘉期における一婦人の生き方——」<sup>①</sup>において主として駱綺蘭その人のイメージをよく伝える「秋灯課文図」や、彼女の袁枚・王文治・王昶への師事のあり方を検討した。その際に使用したテキストは内閣文庫所蔵の駱綺蘭『聽秋軒詩集』であった。

二〇〇三年三月、筆者は上海図書館を訪れる機会があり、同館が所蔵する『聽秋軒詩集』を閲覧することができた。上海図書館所蔵本の末尾には、彼女の編集した『聽秋軒閨中同人集』（嘉慶二年刊）と『聽秋軒贈言』（嘉慶元年刊）が付録されている（次頁写真参照）。この二つの著作は内閣文庫本には付されていなかったため、前稿執筆の際には参考にすることができなかった。『聽秋軒閨中同人集』（以下『同人集』と略称）に収められているのは、駱綺蘭と交友関係のある十七名の閨秀詩人の詩作と手紙である。『聽秋軒贈言』（以下『贈言』と略称）に収録されているのは政界の有力者から在野の文人まで、数多くの男性文人が駱綺蘭を励ますために書いた詩であり、その巻末には、さらに袁枚・王文治らの駱綺蘭宛ての書簡数篇が収録されている。

このような衆多の閨秀詩人が駱綺蘭に書き送った私的な書簡について検討することや、駱氏の事蹟、及びそこに描き出された文人世界の様相を窺うことは、当時の閨秀詩人の文学生活や閨秀詩人の觀念を理解するために、少なからず有益であるに違いない。更に『贈言』に収録された袁枚の書簡は二十三篇にのぼる。これらの書簡は近時整理出版された『袁枚全集』<sup>②</sup>には収められていない。拙文の紹介によって、『贈言』に載せる資料が『袁枚全集』を増補するだけでなく、袁枚や清代文学研究に少しでも参考になるならば幸甚である。

聽秋軒閨中  
同人集  
句曲駱氏  
藏板

聞中同人集詩序  
女子之詩其下也雖於男子間秀之各其稱此亦難也  
予士何也身在深明是問絕少性無朋友滿習以簡其  
性靈又無山川登覽以發其才業非有賢又其為之而  
難哉分正偶不能全其業也正丁嗣後操行日事則如  
木應精神又往往無事焉之才士取書案登科第角並  
滿場交番日爾又有當代若余已遊從者對德之其各  
其詩也其人耳目至問秀事亦既風聲之士相為倡和  
自必愛惜而此傳之不至其誠或可為非人且不解也

聽秋軒贈言  
言  
句曲駱氏  
藏板

聽秋軒贈言序  
東坡先生云人生誠字莫甚於非其字之不可識由世  
人之憂思存誠誠字而生世然東坡以中朝人懷直道  
而行往往為人所排故予覺於憂思若乃其身固閑之  
中備非禮制之嘆嗚之古人不感非禮之無而已乃進  
云不感天子无二嗚嗚之謂人生排進之一過一身兼之  
以就康成之言未盡出於前輩也問曰念無尚才與否  
可以明志惡業當代先生大人投贈為誠語加矣計歷  
年以來或曰君昔美為計誠語或于字也八十思贈書

駱綺蘭の『聽秋軒閨中同人集』および『聽秋軒贈言』について

以下、まず駱綺蘭が生存中に編定した『同人集』及び『贈言』の書簡の内容とその編集出版意図について究明する。また書簡の特徴について、清代女性文学史及び女性生活史の観点から考察を加えてみたいと思う。更に駱綺蘭の交友關係に注目し、前稿において駱氏の生涯について説き及び得なかつた新たな知見をも加えたい。

—

所謂「てがみ」に相当するものは、旧来の詩文集では、多く書、啓、尺牘などの呼称で分類収録されている。その雅称には鯉素、雲錦書、青泥書、飛奴、代兼金などがある。尺牘は中国文学史の中では小品という文学ジャンルに属する。明清時代、小品文の熱狂的な大流行の下で、書簡集が続々と出版された。例えば、湯顯祖『玉茗堂尺牘』、袁弘道『袁中郎尺牘』、陳繼儒・金聖嘆『才子尺牘』などの美文が紹介され、文壇に持てはやされた。清代における最初の尺牘選本は、康熙元年に刊行された李漁編『尺牘初徵』十二巻である。その後、尺牘を編纂して世に問うたものには、王世貞編『尺牘清裁』六十巻、周亮工編『明二百家尺牘』、『尺牘新鈔』などがある。

明清時代はまた、女流作家がおびただしく輩出した時代であった。彼女たちは詩、詞の世界に限らず、あらゆる文学ジャンルへの参加を果敢に試みた。趙世杰は『歷代女子文集』を編定し、明の徐媛をはじめ、多くの女性が書いた尺牘作品を積極的に発掘顕彰しようとした。更に汪淇（清、錢塘の人、字は愴漪）は女性の尺牘に光を当てようとて、『尺牘新語』一編の第二十四巻を「閨閣類」として世に著した。その序文に云つた。

汪愴漪曰：微尺牘而至於閨閣、誠所謂珠玉咳唾、錦繡心肝矣。觀者得無哂其雲雨情、脂粉氣耶。曰、不然。夫女之異於男者、徒以其形質耳。若夫書盤織錦之才、挽車舉案之操、斷臂投崖之節、突圍討叛之勲、何一甘出男子之下、又況尺璧碎金、如區區魚箋鷹帛乎。（汪愴漪曰く、尺牘を徵して閨閣に至るは、誠に所謂咳唾を珠玉にし、心肝を錦繡にするなり。觀る者、其の雲雨の情、脂粉の氣を哂うこと無きを得んや、と。曰く、然らず。夫れ女の男に異なるは、徒だ其の形質を以てのみ。夫の書盤織錦の才、挽車舉案の操、斷臂投崖の節、突圍討叛の勲の若きは、何ぞ一に男子の下に甘出せんや、又況んや尺璧碎金、區區たる魚箋鷹帛をや。）

ここで汪淇は、まず女性が男性と異なる所はただ身体的な性差のみだと断言する。それから、明末から現れた詩文の才に富む才女や、暗黒の世に大いに忠義、忠誠を輝かせた女性の功績や情操などは、何一つ男子に劣るものではないと評価している。したがって流暢に佳句を吐く女性の書簡を探し求めて刊行することは、価値のあることだと汪淇は考えていたと思われる。以上のような女子の文才気節を賞賛する言葉は、実は明末以後に顕著となった女性崇拜思想の抬頭を二示す表現である。

ところで、駱綺蘭はなぜ自分と女性の友人との唱和の詩や往復書簡を出版しようとしたのであろうか。先に述べたように、明清時代には女性に対する評価が急速に高まり、女流文学がめざましい発展を遂げたというものの、多くの女性文学家にとって、その文学創作のための条件や地理的な環境は、男性に比べるとやはり大きな制約があると感じられていたようである。<sup>4</sup>『同人集』編集の際に、駱綺蘭は女性の身で執筆に専念することと著作を後世に伝えることの難しさを、序文の中で次のように訴えている。

女子之詩、其工也、難於男子、閨秀之名、其傳也、亦難於才士、何也。身在深閨、見聞絶少、既無朋友講習、以淪其性靈、又無山川登覽、以發其才藻、非有賢父兄爲之遡源流、分正偽、不能卒其業也。迄于歸後、操井臼、事舅姑、米鹽瑣屑、又往往無暇爲之。(女子の詩は、其の工みなること男子よりも難く、閨秀の名は、其の伝わることも亦た才士よりも難きは、何ぞや。身、深閨にありて、見聞絶えて少く、既に朋友講習の以て其の性靈を淪つこと無く、又、山川登覽の以て其の才藻を発すること無く、賢父兄の之が爲に源流に遡り、正偽を分つこと有るに非ずんば、其の業を卒つる能わざるなり。于き帰ぐ後に迄んでは、井臼を操り、舅姑に事え、米鹽瑣屑、又、往往にして之を爲すに暇無し。)

このように女性が文学活動に携わるには外的な阻害要因が多いと吐露したのは、駱綺蘭が初めてではない。明末の女性戯曲家で、『相思硯』を著した梁孟昭(夷素)が、すでに類似した発言をしている。<sup>5</sup> 駱綺蘭は著作を自己表現のための手段とはつきり意識していたのであるから、それが後世に伝わる困難に思い至ると、ますます焦慮感を禁じ得なかったのである。男性文人と比べてとかく埋没しがちな女性の文学作品にせひとも脚光を浴びさせたいという駱綺蘭の作家としての強い責任感、多士済々の女性詩友と自分との詩文唱和集の編集出版へと駆り立てた

のである。

『同人集』序文はまた、駱綺蘭自身が文学に従事した過程を述べ、当時、男性文人と公然と交際することに対して浴びせられていた非難に対して次のように反駁している。

深悔向者好名太過、適以自招口實。但結習未除、每當涼月侵簾、焚香默坐時、於遠近聞秀投贈之什、猶記憶不能忘。披誦一遍、深情厚意、溢于聲韻之外、宛然如對其人。因哀而輯之、以付梓人。使蚩蚩者知巾幗中未嘗無才子、而其傳則倍難焉。彼輕量人者得無少見多怪也。（深く悔ゆ、向者に名を好むことただ過ぎ、適ま以て自ら口実を招きしを。但だ結習未だ除かれず、涼月、簾を侵し、香を焚いて默坐する時に當る毎に、遠近より聞秀投贈の什、猶お記憶して忘る能わず。披誦一遍すれば、深情厚意、声韻の外に溢れ、宛然として其の人に対するが如し。因りて哀めて之を輯し、以て梓人に付す。蚩蚩たる者をして、巾幗の中に未だ嘗て才子無くんばあらざるを知らしむるも、其の伝は則ち倍ます難きなり。彼の軽がるしく人を量る者は、見少くして怪多きこと無きを得んや。）

以上のことから、女性文人たちの真実の情感に溢れた詩文の優秀さを男性中心社会に認めさせるために、駱綺蘭は敢えて『同人集』の刊行に踏み切ったのである。『同人集』の出版からは、駱綺蘭の聞秀詩人としての自負が窺われると同時に、女性たち（駱綺蘭を含む）のために声を発するという主張も窺えよう。最後に彼女は、本書の出版によって自分の詩人としての名声を顕揚できることを心から嬉しく思い、次のように語っている。

蘭編是集、自傷福命不如同人、又竊幸附聞秀之後而顯矣。（蘭の是の集を編むは、自ら福命の同人に如かざるを傷み、又竊かに聞秀の後に附して顕われんことを幸えばなり。）

自分の名前を他の聞秀詩人の後に取り上げるといふ駱綺蘭の編集戦略は、女性の優れた文芸作品を顕揚するとともに、自分の名声や著作をもそれと共に世に送る非常に巧みな方法であつたと言えるのではあるまいか。

次に『同人集』から駱綺蘭と十七名の女流詩人との文学的交流の実態を窺ってみよう。その十七名とは、江珠（袁枚女弟子）、畢汾、畢慧（袁枚女弟子）、鮑之蘭、鮑之蕙（袁枚女弟子）、鮑之芬、周澧蘭（袁枚女弟子）、盧元素（袁枚女弟子）、張少蘊（鮑之蘭の姪）、潘耀貞（不明）、侯芝、王瓊（袁枚女弟子）、王倩（袁枚女弟子）、王懷杏（不明）、許德馨（袁枚女弟子）、秦淑榮（不明）、葉毓珍（不明）である。十七名のうち八名は袁枚の女弟子である。駱綺蘭と同じく江蘇省丹徒に住んでいたのは鮑之蘭・之蕙・之芬の姉妹と張少蘊・王瓊であり、他は例えば江珠と王倩は蘇州、畢汾と畢慧は大倉、盧元素と許德馨は江都、周澧蘭は長洲というように、それぞれ異なる地域に住はしているが、皆全て儒教倫理にあまりとらわれない江蘇省出身といえる。そして、彼女らには鮑之蘭・鮑之蕙・鮑之芬・王瓊のような野文人の妻もいれば、逆境にめげず詩文に巧みであり、舞剣をよくした江珠のように経済的に自立した女豪傑もいる。更に高官の家族である畢汾・畢慧・侯芝のような環境に恵まれた才女までもいた。

十七名の中で特に注目したいのは侯芝（一七六四—一八二九）である。侯芝、字は如芝、号は香葉主人、江蘇省江寧の人である。彼女は進士侯学詩の娘であり、夫梅冲は嘉慶五年（一八〇〇）の举人で、法式善の『梧門詩話』によれば、梅冲もまた袁枚の高足であった。古文家姚鼐の弟子として知られる梅曾亮は侯芝の息子である。一門の声望が高かった侯芝の作品は、概ね儒家的な道德を期待されていた妻や母のあるべき姿を描いたもので、「女宗」（模範的な女性）と賞賛されたとい<sup>⑧</sup>。彼女は有名な閨秀詩人であっただけでなく、当時優れた弾詞小説の編者でもあった。侯芝の弾詞には『玉釧縁』『再生縁』『再造天』『錦上花』の四種がある。駱綺蘭は侯芝『錦上花』のために題贊を書き与えた。そもそも清代は様々な説唱芸能が一齐に開花し、盛況を呈した時代でもあった。駱綺蘭が『錦上花』弾詞に興味を示したのは、そのような時代の雰囲気の影響を受けたものであったと言える。

駱綺蘭と侯芝の二人の交流は、まず文通によって開始された。侯芝の書簡に云う。

兩載神交、三秋注想、欲面無期、論心何日。今春初、夫子赴新安之便、曾寄小詩四章、……呈史席斧削、而夫

駱綺蘭の『聽秋軒閨中同人集』および『聽秋軒贈言』について

子造府之時、值夫人曉粧未竟、朱門咫尺、不啻江海之遙、畫閣深沈、恍若雲霄之隔、至今猶爲悵悵耳。(両載、神交わり、三秋、想いを注ぐ、面わんと欲するも期無く、心を論ずるは何れの日ぞ。今春初め、夫子、新安に赴くの便に、曾て小詩四章を寄せ、……史席の斧削に呈す。而るに夫子、府に造るの時、夫人の曉粧未だ竟らざるに値う。朱門は咫尺たるに、啻に江海の遙かなるのみならず、画閣は深沈として、恍として雲霄の隔つるが若く、今に至るも猶お爲に悵悵するのみ。)

侯芝の夫梅冲は妻のために、書簡を駱綺蘭の家まで届けに行ったという。書簡の内容は、まず駱綺蘭に自分の敬慕の気持ちを語り、それから、自作の詩を駱綺蘭に添削してもらおうよう頼むものであった。このようことから、当時の閨秀詩人は閨房から出なくとも、書簡の往復を通して、遙かな空間上の距離と阻隔を超えて、学問討論の機会や精神生活の充実を得られていたことが窺えよう。侯芝と駱綺蘭はまだ面識を得ていなかったのであるから、駱綺蘭に対する思慕の情に富んだ書簡から溢れるこまやかな友情は、ほかならぬ「詩文」の実作を通して深められていったものに違いないであろう。そして、侯芝は書簡の末尾に美辞麗句を綴り、切磋琢磨のできる良友を求めようとして、駱綺蘭に是非当家を訪問してくれるよう懇願している。

忽焉青鳥飛空、天花散彩、始知遠駕雲駟、近臨杞里。聞聲欣躍、頓慰渴懷、本即欲驅候、自慚受教無地、蹶蹶不前、倘蒙不棄、望香車過我、俾得拜瞻雅範、藉領清談、芝三生之幸也。(忽焉として青鳥は空に飛び、天花は彩を散らすごとく、始めて知る遠駕雲駟の近く杞里にの臨むを。声を聞きて欣躍し、頓に渴懷を慰む。本即ち驅候せんと欲するも、自ら教を受くるに地無きを慚じ、蹶蹶して前まず。倘し不棄を蒙らば、香車の我を過らんことを望む。雅範を拜瞻し、清談を藉領せんことを得しめば、芝三生の幸いなり。)

このような並々ならぬ傾倒、敬意に満ちた言葉から、駱綺蘭が閨秀詩人の間で相当尊敬されていたことが推測できるとともに、侯芝の修辞上のテクニク、身につけた奥床しい教養、友人関係の中に知的刺激を求める心情なども、書簡から自ずと読み取ることができる。その後、駱綺蘭は侯芝に自分の描いた画を贈ったりして互いに親しく交流した。やがて、『同人集』に収める侯芝の「雨中折碧桃花一枝贈佩香夫人、承賜詩二首、依韻奉答」に「揮毫尚憶菊花前、睽隔清芬又一年」(揮毫、尚お憶う菊花の前、清芬に睽隔すること又一年)とあることから、菊花の

咲く清々しい秋に、二人の面会はようやく実現したことが分かる。

次に畢汾から駱綺蘭に宛てた書簡を検討してみよう。畢汾は乾隆の進士、湖廣総督畢沅の妹であり、字は素溪、著作に『梅花繡佛齋草』がある。畢汾も侯芝と同じように、書簡においてまず駱綺蘭を懐かしむ心情を告白し、それから自分の詩を駱綺蘭に添削してもらいたいと述べた。

前接令業師夢樓道兄書、得悉夫人起居眠食、俱爲安善、聊慰遠懷。……蘭泉侍郎使來、又接華牋、多蒙存注殷拳、捧讀之餘、益令人感激於五中也。春間幽居獨處、又成七律二章、……向因鱗鴻之便、未及寄呈、今與舊作一併奉上、即請斧政。(前に令の業師夢樓道兄の書に接し、夫人の起居眠食、俱に安善と爲すを得悉し、聊か遠懷を慰む。……蘭泉侍郎の使 来り、又 華牋に接す、多く存注殷拳を蒙り、捧読の余、益ます人をして五中に感激せしむ。春間に幽居独処して、又、七律二章を成す。……向には鱗鴻の便に乏しきに因りて、未だ寄呈するに及ばざるも、今、旧作と与に一併して奉上し、即ち斧政を請う。)

以上の内容によれば、畢汾は駱綺蘭の師である王文治(夢樓)の手紙から彼女のことを知り、さらに駱綺蘭のもう一人の師である王昶(王蘭泉)の使者から彼女の書簡を手に入れたことが分かる。この二人の男性詩人は直接に駱綺蘭の文学創作を指導するだけではなく、間接的に駱綺蘭と女性友人たちの交際を援助してもいたのである。したがって、駱綺蘭が他の閨秀詩人とのネットワークを広げられたのは、彼女自身の社交手腕や閨秀詩人としての名声だけでなく、彼女たちの周囲にいる男性詩人(例えば、駱綺蘭の先生王文治や、侯芝の夫梅沖など)の尽力によって、空間的な障害を克服し、彼女らは互いに身の上を語り、交流を深めることが可能になったのであった。

閨秀詩人の同友を求める気持ちを伝え、と彼女たちの学才を顕彰する駱綺蘭の『同人集』出版は、頻繁な詩文の交流によって、遂に実現することになった。畢汾は『同人集』刊行の計画を知って、先に引用した書簡の中で次のように語っている。

夫人欲刻同人集、亦爲雅事。但汾山歌野調、不足以入君子之目、祈夫人爲我藏拙、恐貽笑於名士之才也。聞夫人時刻到吳、倘秋間丹桂開時、能掛帆到舍、一暢離情、余之所深望也。(夫人の同人集を刻さんと欲するは、亦た雅事と爲す。但だ汾の山歌野調は、以て君子の目に入るに足らず、夫人の我が爲に拙を蔵せんことを祈

駱綺蘭の『聽秋軒閨中同人集』および『聽秋軒贈言』について

り、笑いを名士の才に貽さん<sup>10)</sup>ことを恐る。聞くならく、夫人は時刻呉に到ると。倘し秋間 丹桂開く時、能く帆を掛けて舍に到り、一に離情を暢ばせば、余の深く望む所なり。(

畢汾は、『同人集』の出版を文壇の雅事として称賛する。彼女はここで、自分の作品はまだ未熟だと謙遜しているが、一方では更に代書詩「小詩二律代簡佩香夫人」二首を駱綺蘭に奉呈し、自己の文才が今後世に認められることに大いに期待してもいるのである。<sup>12)</sup>

畢汾を含め、当時多くの閨秀が次々と作品を駱綺蘭の所に送り、添削を依頼したことは、まさに「群媛宗牛耳」(群媛、牛耳を宗とす)<sup>13)</sup>と述べるが如く、駱綺蘭が当時女流詩人の盟主のように尊敬されていた事実を反映している。そして、以上取り上げた書簡の内容から、閨秀詩人たちは喜んで駱綺蘭に詩を書き寄せ、『同人集』の出版に喜んで協力していたことが分かった。『同人集』の刊行という事業に対して、駱綺蘭の友人たちも極めて歓迎していることから、清代の閨秀詩人は文学鑑賞及び文学伝播に対して自分の果たす役割に、ますます自信と自覚を高めていったと言えよう。更に、詩文や書簡を通して幅広く交友を広めた清代の閨秀詩人の活発な文芸活動は、女性を家庭の中だけの役割に埋没させることなく、個人の才能と存在意義を確かめることを意識させる意味があったと思われる。

三

『同人集』に収める閨秀詩人たちの書簡とともに、『贈言』所収の男性詩人から駱綺蘭に宛てられた書簡にも見るべきところは少なくない。例えば袁枚の書簡には、師弟の心温まるやりとりの一端が窺われる。

隨園老人枚拜覆、佩香世妹閣下、正月十九日使者來、接手書及西津閣新詩、深慰遠懷、且知有吾鄉西湖之行、正與老人回杭掃墓重遊天台之意相合、極可同行、一路酬唱、……、駕到杭州、寓居何處、望早示知、以便老人走訪。邀至湖樓、與冊上群仙大會、拈題賦詩、豈非千秋佳話乎。世妹佳作一刻入『詩話補遺』第三卷、一刻入『續同人集』、閨秀一門、業已告竣、因錯字有擾處、須三五日後才能寄上、或世妹來時、可多刷數本帶蘇杭、作

土宜送人最雅。(隨園老人枚拜覆、佩香世妹閣下、正月十九日に使者來り、手書及び西津閣新詩に接し、深く遠懷を慰む。且つ吾が郷西湖の行有るを知る、正に老人の杭に回り墓を掃き、重ねて天台に遊ぶの意と相合す、極めて同行して、一路酬唱すべし、……、駕、杭州に到れば、寓居何れの処なるか、早く示知せられ、以て老人の走訪に便ならんことを望む。邀えて湖樓に至り、冊上の群仙と大いに會し、題を拈じ詩を賦せば、豈に千秋の佳話ならずや。世妹の佳作、一は『詩話補遺』第三卷に刻入し、一は『統同人集』に刻入す、閨秀の一門は、業已に竣るを告ぐるも、錯字の振する処有るに因りて、三、五日の後を須ちて、才めて能く寄上せん、或は世妹來る時、數本を多刷して蘇・杭に帶し、土宜と作して人に送るべくんば最も雅ならん。)

この書簡の内容を以下に要約しておこう。

一、向学心の強い駱綺蘭は、『聽秋軒詩集』卷二所収の「待夢樓師雪中登西津閣」詩を袁枚に示し、斧正を仰いだ。閨秀詩人たちにとって書簡は単なる意志疎通のための道具ではなく、詩文の上達のための大切な媒介でもあった。

二、墓参のために、袁枚は杭州に帰り、ついで再び天台山に遊び、その帰途、閨秀詩人を西湖の寶石山莊に集めよつとのことを記しているから、この書簡は乾隆五十七年(一七九二)の作と判断できる。袁枚は杭州への旅の同行と、西湖の詩会への参加を駱綺蘭に要請した。そこからは、連絡を取り合つて、女弟子と会おうとする袁枚の切なる思いが伝わってくる。同時に、家に閉じこもることなく、旅や人間関係の拡大を通して、より広外的の世界に対する目を開かせようという袁枚の教育方針をも窺うことができる。

三、駱綺蘭を「世妹」と称していることから、袁枚の彼女に対する接し方には、身近な存在の親しみやすい先生として、閨秀詩人を尊敬し、互いに対等なコミュニケーションを取るうとしていたことが分かる。

如上の傾向は同じく、『贈言』に収められている王文治の書簡からも見て取ることができる。

奉題皈道圖古詩一章、……是老人近日極得意筆。尊作甚佳、第四首定字易也字、似更圓活。(奉じて皈道圖古詩一章を題す、……是れ老人の近日極めて得意の筆なり。尊作は甚だ佳なるも、第四首の定字を也字に易うれば、更に円活なるに似たり。)

以上の「尊作」とは『聽秋軒詩集』卷四所収の「自題歸道圖四首……」である。果たして其の四に「料得鴛鴦也羨仙」(料り得たり、鴛鴦も也た仙を羨むと)とあることから、駱綺蘭は王文治の意見を素直に受け入れていることがわかる。中国文学史上、駱綺蘭の如く自ら学詩の軌跡をありのままに示し、添削資料を公開した例はごく珍しいと言える。恐らく文章芸術と学問を懇切に伝授してくれた王文治のおかげで文壇での成功を獲得しえた駱綺蘭にとって、師弟関係のありかたを真実を損なわないままに伝えることは、弟子としての義務と感じられたのであろうか。

『聽秋軒詩集』出版の際にも、王文治は駱綺蘭に丁寧なアドバイスを与えている。

佩香女弟子、文几尊稿刻成、送上清覽。原稿已還尊處、尊處可校對。祈先細對一遍、然後將刻本及原本、同送愚處再校、庶幾無誤。(佩香女弟子、文几の尊稿刻成し、清覽に送上す。原稿已に尊処に還れば、尊処にて校對すべし。祈るらくは、先ず細かに對すること一遍し、然る後に刻本及び原本を將て、同に愚処に送りて再校すれば、誤り無きに庶幾からんか。)

ところで、駱綺蘭が『贈言』三巻を出版した意図はいったい何だったのであろうか。『贈言』の序文において、駱綺蘭はその出版の経緯を次のように述べる。

蘭自念無奇才異節、可以稱述、狷蒙當代先生大人投贈詩篇、謬加褒許。歷年以來、或白首蒼英、高軒親過、或玉堂宿彦、千里貽書。予讀而藏之、卷如束筍、雖珠玉連篇、語多溢美、而用意之厚、亦何可忘。頃者寄意空三元、罕事吟咏。每風雨之晨、皎月之夜、取名流卷軸、哀而輯之、付諸剖劂、以詩之先後爲次序。(蘭自ら念うに、奇才異節の以て稱述すべき無きに、狷りに当代の先生大人に詩篇を投贈せられ、謬りて褒許を加えらるるを蒙る。歷年以來、或は白首蒼英、高軒親しく過ぎり、或は玉堂宿彦、千里書を貽らる。予讀みて之を蔵し、卷、束筍の如し、珠玉篇を連ね、語は溢美多しと雖も、而も意を用うるの厚き、亦た何ぞ忘るべけんや。頃者意を空三元に寄せ、吟咏を事とすること罕なり。風雨の晨、皎月の夜毎に、名流の卷軸を取り、哀して之を輯め、諸を剖劂に付し、詩の先後を以て次序と爲す。)

以上から、まず駱綺蘭が、学問徳望のある男性文人から受け取った多数の珠玉のような詩や書簡を精読し研究する中で、自分自身の思想を深めていった様子が窺える。そもそも『荀子』「非相篇」に「贈人以言、重於金石珠玉」

(人に贈るに言を以てするは、金石珠玉より重し)とあるように、所謂「贈言」とは、正しい言を以て、人に送り励ます意である。したがって、贈序類の文章は即ち「贈言」である。清初の閨秀詩人林以寧は自分の書いた友人を励ます文章を「贈言」として編集している<sup>〔1〕</sup>。しかし、家計があまり裕福ではなかった寡婦詩人駱綺蘭が、林以寧とは逆に、周囲の文人から受け取った詩文を刊行しようとした意図は、本当に彼女が序文で言っている通り、単に衆多の名士から寄せられた厚い関心が忘れ難いだけだったのだろうか。

かつて駱綺蘭は「秋灯課女図」を作り、秋のもの寂しい夜に娘に教育を施す我が身を描いた(前稿参照)。彼女は、図に描かれた女子へ学問を伝授する熱意と後世の模範となる立派な婦徳によって、多くの人から最高の賛辞をかち得た。「贈言」を検討した限りでは、「秋灯課女図」の題詩や題賛を書いた男性詩人は五十六名である。政界の有力者から在野の知名文人に至るまで、これほど多くの自分を褒め称える詩や文章を一齐に公刊したのは、つまりは自己の文名や社会的人望を高めるための自己宣伝手段ではなかったかと疑われる。実は、「贈言」に収められた袁枚から駱綺蘭宛の書簡の中でも「女子之好名、更甚於男子也」(女子の名を好むや、更に男子よりも甚だし)と、当時の女性の名声を追求する強い思いが述べられている。したがって、自分を賞賛する「贈言」を生前に出版するという駱綺蘭の行動は、まさに清代における閨秀詩人の持つ烈々たる自己肯定溢れる雰囲気の中で、自ら成就する道を積極的に切り開こうとした活発で果敢な行為であったと思われる。

また、序文の中で、四十歳になった駱綺蘭は宗教への信仰が篤くなり、詩をあまり書かなくなったことを告白している。しかし、著述は少なくなったにせよ、「贈言」を出版し、わが詩人としての名の不朽を、駱綺蘭は強く願っていたのかもしれない。

#### 終わりに

以上、駱綺蘭『同人集』を通して、閨秀詩人たちの交流、及び女流文学の指導者としての地位にあった駱綺蘭の活動を考察した。駱綺蘭を中心とする閨秀詩人たちの人的ネットワークは、書簡の往復によってその空間的な障害

を乗り越えていった。彼女らは詩文のやりとりの中で、互いに社会生活における心の慰めを得、互いに創作活動を励まし合い、著作に対する自信を強めていったのである。

『同人集』に収められた潘耀貞から駱綺蘭宛ての書簡の「前日駕過廣陵、得親雅範」（前日、駕、広陵を過り、雅範に親しむを得たり）という言葉、及び鮑之芬の「春初佩香夫人見訪、并和去秋奉懷原韻」という詩題が示すように、駱綺蘭はいつも女性の友人に会いに自ら行った際に、地元の才媛と深い繋がりを持つことになり積極的であったようである。一方、四方を巡遊すると同時に、駱綺蘭は深い信頼を得た袁枚と王文治のために書簡を送り届け、また多くの著名な文人墨客と交際があったので、彼女の存在は日増しに認められていった。このように駱綺蘭が社交的、社会的な生活などにおいて比較的自由な生き方をしているのは、寡婦になり、家庭と夫の束縛から脱け出した後の自らの選択によるものである。こうした生活の自由は、駱綺蘭が文学の世界で成果を挙げる上で有利な条件を提供したのは言うまでもない。それはまた、清乾嘉期における江南の社会では、男が外を司り、女が内を司るという社会的性差による分業は、実際には儒教の建前として思われているほど厳格な制約ではなかったという事実をも反映している。

そして、縷々述べてきたように、駱綺蘭には自尊的意識を示す発言が実に多く、声名を求める意欲が非常に高かった。自ら男性文人との贈答の詩文を集めた『贈言』を出版し、しかもその内容は殆ど自分を高く評価したものであったことから、駱綺蘭の自負心の強さを感じられると共に、どれほど多くの清代男性文人が女流文学の発展に好意を持っていたかをも伺うことができる。

そもそも中国社会では親や祖先に対する孝を重んじる儒教的価値観から、一般に寡婦の地位は家庭内でも社会的にも高い。しかし、息子を持たない寡婦の地位は相対的に低く、悲惨な人生を送るものも多かった。恐らく夫の死後、養女しか持っていない駱綺蘭は、自己実現の願望と性別、家庭、或いは宿命との間に様々な衝突が孕まれていることを自覚したであろう。そのため、男性文人から受けた厚い恩情を忘れないことを建前とし、『贈言』の出版を通して自ら声名を追求する欲望を満足させると同時に、自分の詩人としての名譽や社会的地位を高めさせる目的も達成しようとしたのではあるまいか。

駱綺蘭の師である袁枚の周囲にはいつも多くの友人が集まり、袁枚もまた彼らとのやりとりの詩文を『続同人集』と名付け、生前中早くも乾隆年間に出版している。因みに『同人集』という書名は、袁枚の序文に拠れば明末の冒襄（一六一一～一六九三）を先例とするもののようである。駱綺蘭の『同人集』及び『贈言』も、まさにこうした袁枚の思想と行動を受け継ぐものであったと言えよう。伝統的な家や婚姻の枠組みを飛び出し、自ら進んで文学の世界に身を投じた駱綺蘭は、出版という作業を通して単なる一人の女弟子から、女性たちがはつきりと自己主張を行うための編集者となり、清代文学史において、男性と対等な立場で活動したひとりの自立した女流詩人となったのである。

駱綺蘭の『同人集』と『贈言』は、当時の閨秀詩人たちがいかにして自己主張したか、男性文人との文学的交流の様態がどのようなものだったかを如実に伝えるものであるため、清代婦女文学とその社会生活を探る資料として見落としてはならない重要な資料である。

#### 注

- (1) 『九州中国学会報』第三十七巻、一九九九年所収。
- (2) 『聽秋軒贈言』に見られる男性文人のうち、その主要な人物は、皇族では豫親王（清太祖の第十五子）・思元主人（豫親王世子、裕瑞）・汲修主人（昭楹）・高官では畢沅（官は湖廣總督）・謝振定（官は御史）・祝徳麟（官は御史）・陳奉茲（官は江蘇布政史）。他に著名な文人では袁枚・王文治・王昶・趙翼・曾燠・姚鼐・法式善・張問陶・樂鈞・吳高梁の名が見える。また江南の詩人としては汪穀・陳基・張鉉・袁通・駱傑の名が見える。
- (3) 王英志編『袁枚全集』一九九三年 江蘇古籍出版社。
- (4) このことに関しては、合山究「明清時代の女性文芸における男性志向について——「巾幗の氣」の除去と「鬚眉の氣」の獲得——」（『九州中國學會報』第四十二巻、二〇〇四年）九九頁にも指摘されている。
- (5) 梁孟昭は「寄弟書」において「我輩閨閣詩、較風人墨客爲難。詩人肆意山水、閱歷既多、……、多奇傑浩博之氣。

駱綺蘭の『聽秋軒閨中同人集』および『聽秋軒贈言』について

- 至閨閣則不然、足不踰閭閻、見不出鄉邦、縱有所得、亦須有體」といふ。(王秀琴編集、胡文楷選訂『歷代名媛文苑簡編』、上海商務印書館、一九四七年)
- (6) 鮑之蘭・鮑之蕙・鮑之芬・王瓊・江珠・畢慧については、合山究「袁枚と女弟子たち」(『文学論輯』第三十一号)をも参照されたい。
- (7) 法式善『梧門詩話』卷十六に「江寧侯香葉、……、外抱孫、…、為隨園高弟」とある。
- (8) 法式善『梧門詩話』卷十六に「江寧侯香葉、……、學守程朱、所謂理而不腐、樸而不陋、誦其韻語、足敦風教、王碧雲名媛詩話以女宗推之」とある。
- (9) 胡文楷『歷代婦女著作考』(上海古籍出版社、一九八五年)卷十二、清代六を参照。
- (10) 『聽秋軒閨中人集』に収める侯芝「佩香夫人以疎竹水仙畫幅見贈詩以謝之」詩の内容による。
- (11) 胡文楷『歷代婦女著作考』(上海古籍出版社、一九八五年)卷十四、清代八を参照。
- (12) 王文治『夢樓詩集』卷二十一「閩苑司花歌為閨秀畢蓮艇作」詩の注に「蓮艇之姑適沈氏、名汾、詩才奇奧」と畢汾の詩を賞賛している。
- (13) 『聽秋軒贈言』の中の胡翔雲「和佩香夫人四十感懷詩兼祝華誕」の詩句。
- (14) 林以寧(一六五五?)、字は亜清、進士林翰の娘、監察御史錢肇の妻である。著に『墨莊詩鈔・墨莊文鈔』、『鳳簫樓集』がある。『墨莊詩鈔・墨莊文鈔』巻一「贈言自序」に「今丁巳(一六七七)五月望後六日、為余初度、因思廿有三載以來、……」とあり、林以寧は二十三歳の時に、人に書き与えた文書、即ち「贈言」を「輯而録之為若干卷、歸而獻諸堂上、諒必有以解母氏之顏」とある。
- (15) 王文治の『夢樓詩集』に「袁簡齋前輩書」がある。その中で袁枚は「夢樓先生閣下、枚於十八日感冒風寒、寒熱大作、不眠不食者三日矣、忽佩香女弟子至、得接手書、讀之如清風徐來、……、因佩香回鎮之便、修札致謝、枚力疾再拜」と言っている。これによれば、駱綺蘭は自宅の鎮江と南京にある袁枚の隨園とを往き來する間に、袁枚と王文治のために書簡を送ったりしていたことが明かである。
- (16) 白水紀子『中国女性の二〇世紀 近現代家父長制研究』(明石書店、二〇〇一年)三十九頁。